

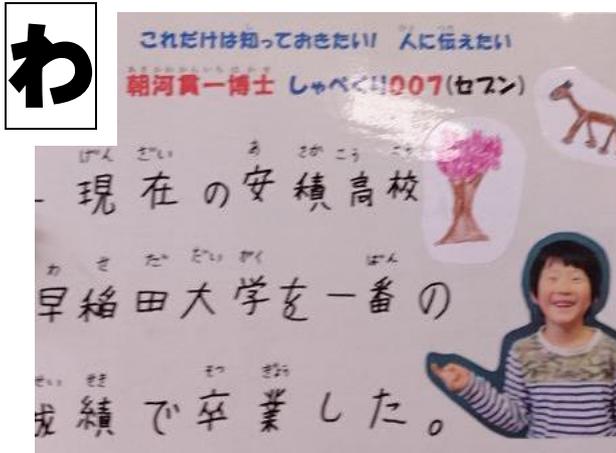
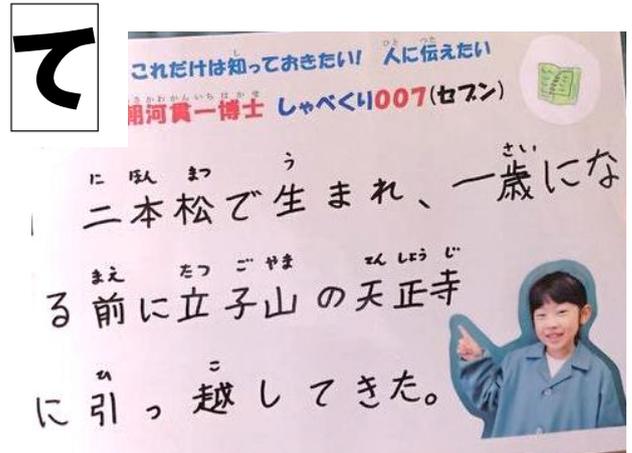
『朝河カルタ』について

- 基礎資料：2019年立子山小児童の総合学習における学び
- カルタへの再編成：2023年NPO 地域のみんなのチカラ

「朝河カルタ」は、朝河貫一博士の後輩である、立子山小学校の児童が総合学習で学び、研究、発表した内容をもとに作りました。「立子山ふれ合いデー」で、みんなでにぎやかにカルタ取り。朝河貫一博士、朝河正澄先生のことを楽しく学びました。

- 博士の生まれは二本松。生後8カ月で立子山の天正寺へ来て、少年期まで過ごしました。
⇒ 天正寺の「て」！

【解説】朝河貫一博士の生まれは現在の二本松市。もと武士だった父・正澄氏の一家は、博士が生後8カ月で立子山の天正寺へ来て、少年期まで過ごしました。

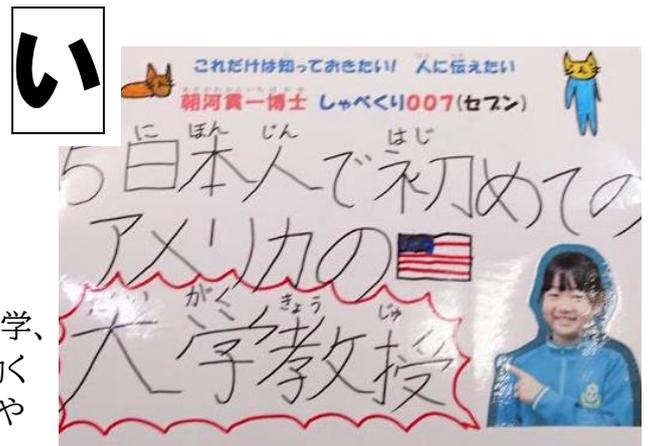


- 博士は郡山の安積高校、東京専門学校(現、早稲田大学)を首席で卒業しました。
⇒ 早稲田大学の「わ」

【解説】博士は立子山から「徒歩」で福島市の町なかにあった福島尋常中学校へ通いました。学校は火災にあったため、郡山の安積に移転しました(現、安積高校)が、博士はそこを首席で卒業しました。その後、東京専門学校(現、早稲田大学)へ進学し、ここも首席で卒業しました。東京では、大隈重信はじめ、徳富蘇峰、勝海舟、坪内逍遙など多くの人と交流しました。

- 博士は、日本人としてはじめてアメリカの大学、名門「イエール大学」の教授になりました。
⇒ イエール大学の「い」

【解説】博士は、日本人としてはじめてアメリカの大学、名門「イエール大学」の教授になりました。そこで働く博士の真摯な姿勢や行動力が、アメリカの教育界や



～カルタを用いて1人ひとりが元気に
貫一博士・正澄先生のことを紹介しました～



立子山ふれ合いデー 6月3日(土) 立子山小体育館



立子山小児童・夏休みの作文のご紹介

博士の思いを受けついで

立子山小学校 5年 寺島 咲絵

朝河貫一博士をご存知でしょうか。博士は日本人で初めてアメリカ・イエール大学の教授になり、日本の歴史を世界中に広めた世界的な歴史学者です。太平洋戦争を止めようとして天皇に大統領からの親書を送ったことも知られています。この朝河貫一博士は、私の通う立子山小学校の大先輩なのです。また、博士のお父さんの正澄（まさずみ）先生は立子山小学校の初代校長として30年も務められ、私の父の曾祖父（ひいおじいさん）や、たくさんの人たちが教えを受けました。朝河貫一博士と正澄先生は立子山地区のほこりです。私たちが総合の学習などで博士の功績やエピソードなどを調べたことがあります。

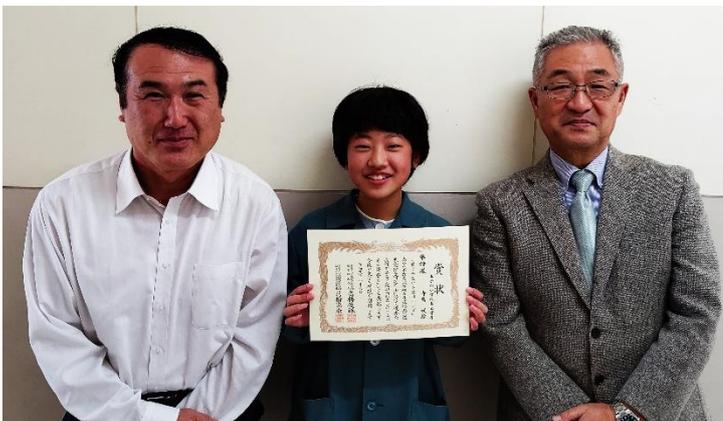
今年は博士の生誕150年ということで、いろいろなイベントがもよおされました。そして、朝河博士の後はいである私たちにも何かできることはないかという話になりました。

もともと、近年の立子山地区は太鼓が盛んで、私も地区の盆おどりや八幡神社のお祭りでも太鼓をたたいてきました。東北絆祭りや福島わらじ祭りにも太鼓隊として参加したこともあります。太鼓は私たちには小さいころからとても身近なものです。そこで、いつもたたっている「盆おどり太鼓」「お祭り太鼓」に加えて、新しく「朝河太鼓」に取り組むことにしました。スタートしたのはまだ寒い1月でした。地区の子どもたちに太鼓を指導している私の父を中心に「どんな太鼓にしていくか・・・?」と、みんなで意見を出し合いました。

私たちが考えたのは、博士の母校である立子山小学校の校歌です。校歌には博士を育てた「豊かな自然」や博士が歩んだ「学びの道」、博士がめざした「明るい日本の未来をつくる」ことなどがうたわれています。そこで、私たちが鼓笛で演奏している校歌のリズムを太鼓に取り入れ、それらの思いを映し出すことにしました。さらに鼓笛でとてもなじみのあるドラマーチをいっしょに使って、私たちらしい演奏を目指すことにしました。

正澄先生のエピソードに「報恩之辞」というものがあります。正澄先生が退職される時に、立子山地区の当時の村民一人ひとりが感謝の思いをこめたメッセージで、りっぱな巻物のようになっていました。正澄先生はそれをずっと大切に、その後朝河博士もアメリカで大切に保管されていたそうです。「報恩之辞」には、立子山村民と正澄先生と朝河博士の大切な思いがこめられているのだと思います。

そこで、朝河太鼓の終末には「報恩之辞」の思いを表現することにしました。フィナーレにつながるとても力づよいリズムで、私も大好きなパートになりました。こうして私たちの朝河太鼓が完成しました。



(左より) 立子山小学校
赤間 聡 校長先生・寺島 咲絵 さん・生亀 紀男 先生



小学生だけで練習していると、なかなか集中できないときもありましたが、立子山小の卒業生である、大学生の兄や中学生の先ばいが練習に来てくれるようになると、まとまりもできてリズムも合うようになってきました。鼓笛のリズムを和太鼓で演奏するというのはとても新せんで、練習も楽しくなっていました。

6月に地区で初めて発表することになりました。学校の体育館に地区の方々がたくさん集まり、市の教育長さんや、テレビや新聞の取材の方が来ていてきん張しましたが、朝河太鼓の演奏は大成功でした。たくさんの拍手をいただいてとてもうれしかったです。

8月には県立図書館で朝河博士の講演会があり、オープニングで朝河太鼓を演奏しました。図書館の大きな講堂で、たくさんの人たちの前で朝河太鼓を紹介できました。ずっと練習してきた成果を発揮できてよかったです。

そして8月14日には4年ぶりに地区の盆おどりがありました。スローガンは「舞い踊れ・朝河博士のふるさと・立子山の青空へ」で、博士の生誕150年を記念する大会となりました。朝河太鼓発表のコーナーでは、これまでで一番力づよい演奏ができました。福島市長さんをはじめ地区のみなさん、帰省しているおおぜいのみなさんから、たくさんの拍手をいただき感激しました。

私は朝河太鼓の演奏を通して、大先ばいである朝河博士や正澄先生の気持ちにふれることができたのではないかと思います。和太鼓の「和」と鼓笛の「洋」がいっしょになることは、太平洋戦争を止めようとして、日本とアメリカや、世界中を平和の橋でつなごうと努力した朝河貫一博士のようだと感じています。また、立子山村民から正澄先生への感謝や、それにこたえた正澄先生から立子山村民への感謝の思いが朝河太鼓の力強いリズムになって、たくさんの方々の心にひびいたことで、大きな拍手をいただけたのだと思います。

私たちのふるさと立子山のほこりである朝河貫一博士と正澄校長先生の教えや、平和への願いをこめて作った朝河太鼓にこれからもみんなで取り組んで、元気に演奏していきたいと思います。

(令和5年度 福島地区児童作文コンクール「準特選」受賞)

○ 児童の作文にふれて ○

福島市副市長 斎藤 房一 さん

自分の生まれ育った地域の歴史に触れて今を生きる、というまさに「温故知新」とおりですが、小学生ならではの新鮮な感性で受け止められていることがよくわかる内容です。

発表会や報道などでその思いを共有できるのもいいですね。このことは生涯の礎になるはずですので、大人になっても故郷を思い続けて欲しいと思います。



福島市教育長 佐藤 秀美 さん

咲絵さんが朝河博士の生誕150年の本年、貴重な体験をたくさん積んで大きく成長したことが伝わってきました。

体験だけではなく、このように作文にまとめることによって朝河博士への考えや自分の生き方などをより広くより深く考えることができたのですね。本当に素晴らしいことです。

咲絵さんとお友達の、ますますのご活躍を期待しております。